

多くの宴会が行われていた土穴商店街。当時、ホステス30人が在籍するキャバレーなどがあった。



昭和30年代の赤間駅前。駅前には旅館も数件あり、映画館もあった。土穴に製鉄団地もでき、人の往来が多く、当時はとても賑やかだった。



明治23年(1890)より営業開始して今に至るJR赤間駅

130年前に営業開始したJR赤間駅。人や石炭などの物資の運送により、遠方から訪れる人々も増え、元々は農地だった赤間駅周辺も旅館やお店、物売りなどを中心に商業の街として栄えるようになった。

Akaishi

赤間西

Theme 郷土

About 赤間西地区は土穴、三郎丸、大谷、泉ヶ丘、赤間駅前の比較的狭い校区。住宅地ということもあり、市外から移り住んできた住民が多く住む地域でもある。

水が豊かで農業が行われていた地域だったが、赤間駅営業開始、そして東郷・海老津間の新国道開通。それらによるヒトやモノの流れが唐津街道赤間宿方面から赤間西地区に移行した。それに伴い、この地域は今のようにならぬ最大の人口密集地として発展していき商業地になっていった。



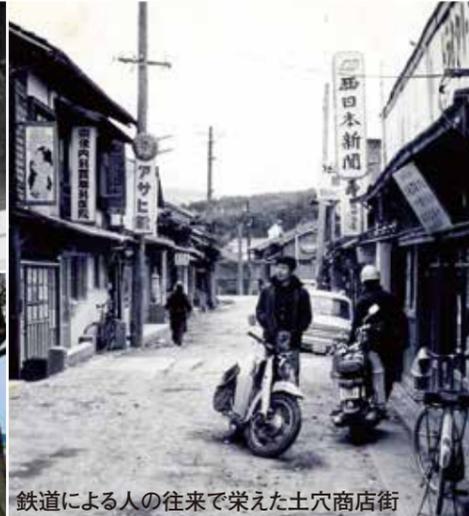
郷土玩具研究会が作った、生目八幡神社に祀られているおし様の折り紙



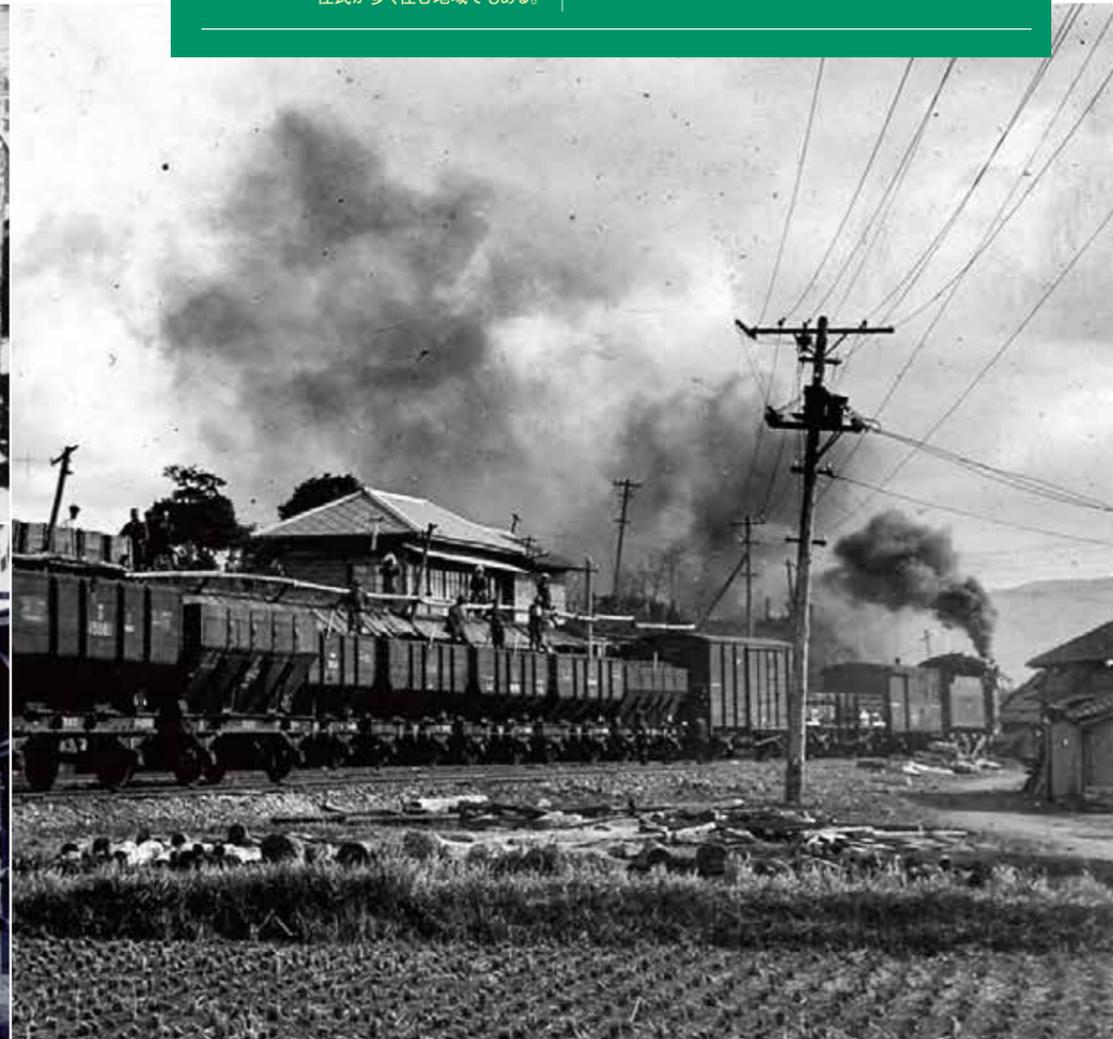
旧赤間駅の朝のラッシュ風景、昭和50年頃(1975)



当時の土穴商店街の人々



鉄道による人の往来で栄えた土穴商店街



写真提供:赤間西地区コミュニティ・センター



現在の宗像の商業中心地



ワークショップを行う際、最初に必ずみあれ祭や沖ノ島などの歴史・文化の話の子供たちに行っている。

すべて研究会のメンバーの手作りでつくられている「みあれ祭の船」。試行錯誤を繰り返して、このデザインに。



「郷土」を辞書で引くと「生まれ育った土地。故郷。」とある。地域が開発され、親世代は移り住んできたかも知れないが、子供たちにとって、その土地は生まれてから大人になるまで思い出が詰まる郷土となる。祭りや郷土玩具遊びなどを通じて故郷を知り、愛着を持つ機会を子供たちへだけだけつくれるだろうか。

赤間西地区は、地区外から移り住んできた人が多く、変わりゆく街だからこそ、残し伝えていくものへの思いがある人々に、今回の取材を通じて多く出会えたように感じた。みなさんも赤間駅を降りた時には、昔の写真と照らし合わせながら変わりゆく街と、そこで暮らす人々の郷土愛を感じてほしい。

「変わりゆく街の中で、伝えていくもの」

が行われてきた背景や移り住んできた人が多い地域。だからなのか赤間西の歴史を地域の方に聞くと「特筆するものがない」と言われることが多い。そんな中、赤間西PTAで出会ったお母さん3人が活動する郷土玩具研究会がある。彼女たちは「子供たちがその地域に生まれ育ったのだから、郷土玩具を通じてその地域の歴史を知ってほしい。」との想いと、宗像に郷土玩具がなかったことから自分たちで開発した手作り玩具「みあれ祭の船」の製作や販売、子供向けワークショップなどを行うようになった。また、地域の「おしし祭り」を身近に感じてもらうため折り紙で作れる獅子頭を考案するなど、地域と子供たちを繋げる活動を行っている。

「地域の歴史を繋ぐ郷土玩具」

時代の変化に合わせて、開発が行われてきた背景や移り住んできた人が多い地域。だからなのか赤間西の歴史を地域の方に聞くと「特筆するものがない」と言われることが多い。そんな中、赤間西PTAで出会ったお母さん3人が活動する郷土玩具研究会がある。彼女たちは「子供たちがその地域に生まれ育ったのだから、郷土玩具を通じてその地域の歴史を知ってほしい。」との想いと、宗像に郷土玩具がなかったことから自分たちで開発した手作り玩具「みあれ祭の船」の製作や販売、子供向けワークショップなどを行うようになった。また、地域の「おしし祭り」を身近に感じてもらうため折り紙で作れる獅子頭を考案するなど、地域と子供たちを繋げる活動を行っている。

鉄道開通による街の発展

小倉から博多へと走るJR鹿兒島本線。電車を利用する人であれば「赤間駅」をご存知の方も多しはず。しかしこの駅が90年ほど前、池田から発掘された石炭を運ぶ要所になっていくことをどれだけの人がご存知だろうか。その昔は唐津街道赤間宿が交通の要所だったが、鉄道や国道が開通して赤間西へと大きく人の流れが変わった。いまでは想像も付かないが赤間駅の北側には土穴商店街があり、映画館やキャバレーもあった。昭和36年(1961)には鉄道の電化によって、通勤時間が短縮。ベッドタウン化が進み、駅前周辺は市内商業の中心地となっていった。